朝鮮文学史

卞宰洙（ビョンジェス）著

朝鮮文学史

卞宰洙 著

青木書店

卞 宰 洙（ピョン・ジェス）

本籍・慶尚南道陜川郡．1932年名古屋市に生まれ，早稲田大学第一文学部露文科を出て，同大学院露文専修科修士課程修了．現在は朝鮮大学校外国語学部教授．

著 書 『現代文学読本 金芝河』（共著，清山社）
『恨と抵抗』（創樹社）

訳 書 『現代朝鮮短編集』1～4巻（朝鮮青年社）
集団創作『不滅の歴史』（朝鮮画報社）ほか

朝鮮文学史

1985年1月20日 第1版第1刷印刷
1985年2月1日 第1版第1刷発行

定価2700円

著者 卞 宰 洙
発行者 山 根 襄

発行所 株式会社 青木書店
東京都千代田区神田神保町1-60
振替口座・東京 8-36582 番
電話・東京（292）0481（代表）
郵便番号 101

© Pyon Jae Su, 1985

新栄堂印刷・協栄製本

Printed in Japan

ISBN4-250-85000-5

目　次

序……1
第一章　原始時代の文学……9
文化の発生……9
原始時代の歌謡と神話……11
第二章　古代の文学……15
奴隷制社会の形成と古代文化……15
説話の発展と抒情歌謡の発生……19
第三章　封建社会の形成と三国時代の文学……27
三国の成立と封建制度の確立……27
三国時代の文化……30
中世文学の発生……32
口伝歌謡と記載文学……38

郷歌の出現と漢詩……46
第四章　後期新羅と渤海の文学……53
後期新羅と渤海国の成立……53
文化の興隆……56
郷歌の盛行……58
漢詩の進歩的傾向……63
説話と芸術的散文……70
第五章　高麗時代の文学……79
中央集権的支配の確立と文化……79
民謡と抒情詩……84
殊異伝体と年代記および伝記文学……92
高麗封建国家の矛盾と文学……97
文化遺産の収集と散文作品……118
抒情詩の新傾向……122
写実主義的傾向……125

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

新しい文学形式の出現……133
第六章　李朝時代の文学……139
李氏朝鮮初期の詩歌……139
稗説の興隆と小説の発生……151
十六世紀の詩歌……162
壬辰祖国戦争前後期の文学……180
十六世紀後半から十七世紀の小説……192
十七世紀の詩歌……201
十八世紀の小説……212
庶民階層の詩歌と実学派の文学……230
封建制度崩壊期の文学……244
終　章　古典文学の伝統と現代の「韓国」文学……257
あとがき……275
人名解説付索引……巻末2

作品・人名・事項索引……巻末18
朝鮮文学史略年表……巻末30

序

1

朝鮮と日本との関係については、よく一衣帯水、ということばがつかわれる。なるほど、このことばを、狭い川または海をへだてて近接している、という意味で解釈するなら、それは正しいであろう。また、歴史的関係の視点で、遠く縄文文化の時代から、朝鮮半島からの影響が日本に強くもたらされてきたことを意味することばとして、これをもちいることもできるであろう。地理的に、朝鮮と日本が近いということは日本人のだれもが知っているであろうが、政治、文化をはじめさまざまな分野における両国の深い関係について、はたしてどれくらいの日本人がどの程度に理解しているのか、という問題になると、それは異常なほどに少ないのではなかろうか。

文学の分野にかぎってみても、『万葉集』に山上憶良をはじめ三十数名の朝鮮系歌人がいて「韓人の衣染むとふ紫のこころに染みて念ほゆるかも」（麻田陽春）の例でみるような、朝鮮や朝鮮人をうたった歌が少なくないという事実を知っている日本人は、それほど多くないといってもまちがいではなかろう。

日本文学は、じつは、古代から現代に至るまで、さまざまなかたちで、朝鮮とかかわっている。『万葉

集』ばかりではなく、『懐風藻』や『文華秀麗集』などでは、朝鮮の使者と日本の文人との間で詩文の贈答があったことを伝えている。土田杏村が『古事記』と『日本書紀』に収められている古歌謡に及ぼした郷歌（ヒャンガ＝朝鮮固有の定型詩）の影響について「記紀歌謡における新羅系歌形の研究」という論文を発表しているが、これも一般にはさほど知られてはいないだろう。

また、新羅の郷札（ヒャンチャル＝吏読）と万葉仮名との相互関係についても、これから考究されるべき問題が多々あるはずである。

数えあげればきりがないのだが、朝鮮と日本との交流は瞥見しただけでも以上のように歴史的にきわめて深いものがある。

それにもかかわらず、朝鮮の文学については、古典から現代に至るまでほとんど紹介されていないのが実情である。例えば、日本の義務教育をうけた人なら、ほとんどの人が『ファウスト』や『ハムレット』、『レ・ミゼラブル』、『戦争と平和』、『水滸伝』などがどこの国の作品であるか、常識として知っているにちがいない。だが、日本人で高等教育以上の教育をうけた人でも、隣国朝鮮の代表的な古典小説である『春香伝』や『洪吉童伝』を知る人は、ごくわずかであるにちがいない。そればかりではない。欧米諸国の文学史が、それぞれの研究者によって多すぎるほどに執筆、出版されているにもかかわらず、日本人の筆になる体系的な朝鮮文学史は、この国ではいまだに一冊として上梓されていないのが現状である。したがって、朝鮮文学は、現在まで、日本に正しく伝えられる機会がほとんどなかったといっても過言ではないであろう。

日本人による朝鮮文学の研究についていえば、高橋亨（旧京城帝国大学の文学部教授）がかつて「今朝鮮文学を……参看すると、……政治方面に於けるより以上に支那の文化に隷属していた文化的従属性の強度、

換言すれば文化的独創性の欠如……」（「朝鮮文学研究」『日本文学講座 第15巻』一九三二年、新潮社）と妄断したような観点を大きく克服していない。いや、克服していないというよりは、日本人による朝鮮文学の研究は、植民地統治を正当化するためになされた〝研究〟以後は、欧米のそれにくらべると、ほとんどなにもなされていないと極言することができる。

このように、朝鮮文学を、どちらかといえば中国文学のエピゴーネンとみる傾向は、現在の南朝鮮の学界でも、一部では完全に一掃されていないようである。だが、朝鮮民族は、原始時代の昔から独自の文化を営々としてきずきあげてきたし、文学の分野でも民族的独自性に富んだ作品を創造している。朝鮮民族ははやくから漢字を用いたために、文字で書きあらわす文学が中国文学の模倣か亜流であるかのようにみられがちであるが、決してそうではない。原始の昔、漢字が渡来する以前に、朝鮮民族はすでに原始文学をつくりだしていた。叙事詩としての巫歌（ムカ）、抒情詩としての民謡、個人の創作になる歌謡、劇詩のジャンルともいえる神前戯楽などをはじめ神話、伝説、説話などはすべて朝鮮民族の独自性を有する口伝文学にほかならない。その後も、漢字を用いたとはいえ、素材とモチーフと主題、思想的内容と形式において、朝鮮民族は独自の文学をつくりだした。なかでも、漢字をもって民族の精神と生活、風俗習慣などを朝鮮語のまま表現することを創案したのは特筆に価する。さきに言及した郷札（吏読）がそれであり、これによって、朝鮮人民は郷歌というすぐれた民族的詩型を生みだしたのである。

李朝時代に至ると、一四四四年に、世界に誇る精巧無比の文字「訓民正音（くんみんせいおん）」を創始し、この固有の文字をもって、郷歌につづく時調（じちょう）（シジョ）と歌辞（かじ）（カサ）などの詩型を新たに創造して朝鮮歌謡の正統的な主流を形成する。さらに、国語を自由に表現し得る文字の出現は、国文小説の隆盛をもたらすと同時に、庶民階層が文学の分野で積極的に活躍できる可能性をもあたえたために、朝鮮文学は十五世紀以後に大きく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

発展し、世界文学の主要な一角を占める独自の民族文学として開花していくのである。

2

原始時代から李朝末期まで、朝鮮文学はさまざまな形式で膨大な量の作品をつくりだしており、質的にも思想的・芸術的水準の高いものが豊饒である。こうした文学的現象を一定の方法論をもって分析し総合して文学史として叙述するのは、容易な作業ではない。朝鮮民主主義人民共和国（以下共和国と略称する）では、解放直後から現在に至るまで、数種類の朝鮮文学史をまとめているが、それらはデテールにおいて多少の異同はあるにしても、方法論的にはほとんどちがいがみられない。それは、共和国では、文学史をまとめる仕事が個人の研究のみにゆだねられているのではなく、一定の方法論にもとづいて集団的に討議をかさねて、執筆グループを組んで著述するというかたちをとっているからであろうと思われる。

いうまでもないことであるが、古典文学は民族の文化遺産のひとつである。現在、共和国では文化遺産の研究と保存作業が国家的な事業として慎重におこなわれているが、そこにつらぬかれているのは、進歩的*なものを批判的に継承・発展させ、そうでないものはこれをしりぞけて、新たな社会主義的民族文化を建設するという原則である。筆者もこの原則にもとづいて共和国の研究成果を参酌して、本書の方法論を定め叙述体系をたててみた。

* 本書でいう「進歩的」とは、おおむねつぎのような意味で用いている。㈠階級社会において、支配階級（統治者ら）を批判し、人民大衆の利益を守る立場、㈡不合理な社会的制度と現実を批判してその改革をめざす立場、㈢対外関係では、外来侵略者とたたかい民族の矜持を堅持する立場。

文学は、それが創作された社会的・歴史的条件、つまり現実的土台を有するものである。換言すれば、文学作品というものはそれぞれの時代の社会的現実の要求と人民大衆の志向があってこそ生まれるものである。本書はこの真理を根底にして、文学を社会的諸関係において考察し、それにもとづいて各作者、作品の意義を明らかにするという方法と叙述体系をとっている。この方法と体系からすれば、当然のことながら、社会および歴史発展の主体である人民大衆の利益を擁護する志向性をもつ文学が第一に評価される。これは、具体的には、階級社会の不合理な現実を批判して変革を志向する文学こそが、真の民族文学として評価されるべきだということを意味する。

つぎには、祖国の自然の美しさを称えたり、外国の侵略から祖国を防衛する戦いを主題にした文学が評価されることになる。朝鮮民族は悠久の歴史を通じて、一度として外国を侵略しなかったことを誇りとする民族である。それとは対照的に、朝鮮は大陸と日本からひんぱんに侵略されるという歴史をくり返さなければならなかった。したがって、朝鮮民族が外国と戦った戦争はすべて祖国防衛のためのそれであった。** 歴史上、多くの外敵との戦いにおいて、朝鮮人民は侵略者に屈することなく民族の尊厳を固守し通した。こうした歴史的経緯は、朝鮮文学が愛国心をモチーフにして、外敵との戦いを主題にする作品を生みだす必然的根拠となったのである。

** ただし、ベトナム戦争時に、アメリカの指示で朴正熙政権が、一九六四年から七三年末のパリ停戦協定にもとづく外国軍隊の撤退時まで、のべ三十一万五千人の軍隊を派遣して多くのベトナム人民を殺害し、朝鮮の民族史に拭いさることのできない汚点を残した事実を、朝鮮人のひとりとしてここで糾弾したい。全斗煥が第九師団第二九連隊の連隊長としてベトナム侵略に積極的に手をかしたことも記憶に新しい。

一般的に、文学史をまとめるにはそれなりの目的があるはずである。本書は、文学史のまとめそのもの

に目的があって書かれたものではない。共和国で出版されている朝鮮文学史は、現代に生きる朝鮮人に、すぐれた民族文化遺産の存在することを知らしめて、そこから民族的矜持をはぐくむところに、大きな目的をおいている。本書は、共和国のそのような目的に依拠しながらも、主には、日本の読者を対象にして、朝鮮民族の精神的営為の結晶である文学の歴史を知ってもらい、朝鮮への理解、ひいては朝・日両国の親善をはかるよすがにしたいという願いをこめて書かれた。また、在日朝鮮人の二世、三世の人々に、民族のすぐれた文化的伝統を知ってほしいという心づもりもこめられている。

本書『朝鮮文学史』は、原始時代から李朝末期までを、以上のべてきたような主旨にしたがって略述したものである。著者の意図がどこまで伝えられるか危惧の念がないでもないが、不備な点は折をみて訂正、加筆するとして、あえてここに江湖に問うものである。

さいごに、蛇足ながら、本書の上梓がひとつの契機となり、すぐれた日本人研究者による本格的な朝鮮文学史の書かれることを心から願うものである。

第一章　原始時代の文学

文化の発生

朝鮮民族の単一性　いうまでもないことであるが、人類のあらゆる精神的および物質的富は労働によって生みだされる。文学もまた、人間の労働を母胎にしてつくられ、発展してきたということができる。

文学を含めて、朝鮮民族の文化的創造の起源を知るためには、民族そのものの起源と、原始的・古代的生活などが明確にされなければならない。

近年、朝鮮民主主義人民共和国の考古学の分野ではめざましい成果がみられた。現在までの考古学的発見と、その発掘作業に裏づけられた資料によって、朝鮮民族が人類史の初期に現在の朝鮮半島内で起源した単一の民族であることが立証された。

氏族共同体社会の最高段階で生まれた多氏族の連合体である種族は、血統を基礎にして同一の言語と風習、信仰をもって一定の地域に居住していた。朝鮮人民は原始時代にいくつかの種族集団をなして生活したが、それらの種族はすべて同一の血統からわかれたものであった。つまり、朝鮮人民はすでに原始時代からひとつの国土で同じ言語と風習をもって暮らしてきた単一民族なのである。朝鮮半島と中国東北地方、

ならびに沿海州などの広大な地域に分布していた古代朝鮮の種族である濊、貊、そして古朝鮮、扶余、沃沮、馬韓、辰韓、弁韓などが同一の言語と風習を有していたことは『後漢書　東夷伝』『三国志　魏志・東夷伝』『晋書』などの中国の文献でも明らかにされている。

朝鮮民族は人類社会の発生の初期から固有の文化を創造してきた。そして、朝鮮における民族文化の歴史的始源をなす原始文化が、同一の言語と風習、それにもまして、同一の血統による原始人の集団によって形成されたということは、重要な意味を有する。なぜならば、同一の種族の集団が一定の原始文化をきずいたか否かという問題は、その民族文化の伝統と優秀さを規定するうえで、また、その原始文化の特徴の規定においても重要な条件となるからである。

原始文化　朝鮮の原始文化は多様な発展をとげた。考古学的な発掘資料と歴史的記録は、絵画と彫刻、音楽と舞踊、神話などの芸術と文化の創造が、旧石器時代の後期（約三万～四万年前）からはじまったことを示している。

自然を征服するためのたたかい、労働条件の改善をめざすたたかいが、古代人の自然と社会に対する認識能力を発達させ、美的観念と芸術的才能をつちかっていくというのは周知の事実である。そして、氏族共同体社会の時期に、古代人の生活感情と志向性を反映した初歩的な芸術と文学が創造されはじめたことをもって、朝鮮における文学の発生とみるのは、まちがいではなかろう。

原始時代の文学と芸術はジャンルが明確にわかれておらず、祭天儀式、あるいは五月と十月の農耕の開始と終了などを契機にした集団的歌舞にその萌芽をみることができる。前掲の『三国志　魏志・東夷伝』には「常以五月下種訖　祭鬼神　群聚歌舞飲酒　昼夜無休　其舞数十人　俱起相随……」とあって、古代朝鮮人の宗教的儀式と歌舞について記述している。朝鮮に限らず、一般的に文学と芸術はこのような祭天

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co